

無縁の女（その二）——「久我雅忠女」私見——

宮川明子

はじめに

龍谷大学仏教文化研究叢書二四 大取一馬編『中世の文学と思想』（平成二〇年二月刊行）に「無縁の女——』とはずがたり』に見る「無縁——」を書かせていただいてから、すでに七年もの歳月が流れてしまった。この間、私を取り巻く「有縁」の世界の煩瑣な雑事に追われ、およそ「研究」とは無縁の生活を送ってしまったことを悔いるばかりである。

この七年のあいだに「無縁」という語、とりわけ「無縁社会」という語は、現代社会を象徴する用語として、日常的に聞かれるようになった。そのきっかけをつくったのがNHKにより「無縁社会」という切り口で制作された一連

のテレビ番組だったろうか。私の住む小さな町の公立図書館にも「無縁社会」に関わる本が数冊収められている。そこで語られている無縁社会とは、行旅死亡人、無縁死に象徴される、孤独で救いのない闇の世界である。

しかしながら網野善彦『無縁・公界・楽』をはじめとする数多くの氏の著作によれば、日本の中世において、「無縁」の輩、「無縁」の世界は、単に共同体から脱落、流出し、体制の外に排除された人々、貧しく卑しめられた世界を意味するのではなく、「無縁・「公界」・「楽」の原理は日本中世における「自由」と「平和」の原理であった¹。

『とはずがたり』の作者・久我雅忠女（本稿では、彼女が二条という小路名で呼ばれることを好まず、常に久我家の出身であることを誇りに思っていたことを尊重して、久我雅忠女と呼ぶことにする）は、網野氏の言う、この「無

縁」の原理が根強く息づいていた中世前期に生まれた。私は、雅忠女が稀有なる「有縁」の世界を心の支えとし、常にそれを意識しながらも、現実の生活においては、とりわけ出家後の生活においては、無縁の原理に支えられて生き、またそれがあるがゆえに旅をつづけることができたのだ、と考えている。七年前に記した拙稿につづいて雅忠女の姿を追ってみたい。彼女に対する見方も基本的には七年前と変わっていないので本稿は前稿を引き継ぐものとする。

本稿中の『とはすがたり』に関する引用文および頁は、すべて久保田淳校注の新編日本古典文学全集に拠る。

一

まず雅忠女のルーツを探ってみよう。彼女が常に誇っていたように、久我家の先祖は村上天皇の皇子・具平親王で、彼女の曾祖父は内大臣・源通親、祖父は太政大臣・久我通光。父方の家系には華麗な肩書をもつ人物が並ぶ。

母方の家系もなかなかのもので、彼女の曾祖父は平清盛女を母にもつ権大納言・四条隆衡、その弟の一人に園城寺出身の僧で鶴岡八幡宮の別当となった隆弁がいる。隆衡の

二男で内大臣・坊門信清女（源実朝室の妹）を母にもつのが彼女の祖父、大納言・四条隆親。『とはすがたり』に数多く登場する叔父の善勝寺大納言・隆顕と彼女の母はその子である。本稿では雅忠女の鎌倉行きを考察するうえで、曾祖父の弟・隆弁と生母の弟と見られる隆顕に注目したい。

まず善勝寺大納言・四条隆顕について見てみると、彼は公卿補任に「母故佐馬頭源義氏朝臣女」、尊卑分脈にも「母佐馬頭源義氏女」と記されている。隆顕の母の父である源義氏すなわち足利義氏は鎌倉幕府の重鎮。義氏の父・足利義兼は源義家の曾孫で、尊卑分脈によれば、その母は頼朝の母の妹・熱田大宮司季範女（一説には範忠女）。頼朝と義兼は父母双方の系譜から血のつながりがあり、しかも義兼の妻は北条時政女。北条政子の妹である。頼朝と幾重にも血縁関係にある義兼は頼朝の挙兵以来、その信頼厚い源家一族として活躍した。義兼と北条時政女とのあいだに生まれたのが、義兼の正嫡・義氏である。義氏は北条泰時女を妻とし、承久の乱には泰時に従って東海道を上り、乱後、恩賞として美作国に数か所の所領を与えられた。尊卑分脈には「武蔵陸奥守」「続拾作者」「建長六十一・廿二卒六十六才 有大往生瑞」などとも記され、文武両道に秀で

鎌倉幕府の宿老として活躍した名門武將である。

雅忠女のもっとも親しかった叔父・四条隆顕はこの足利義氏女を母として生まれた。粥杖事件の折、院を杖で打った女房を指して語る後深草院の言葉「まさしく我を打ちたるは、中院大納言が女、四条大納言隆親が孫、善勝寺の大納言隆顕の卿が姪と申すやらむ。また随分養子と聞こゆれば、御女と申すべきにや、二条殿の御局の御仕事なれば、まづ一番に人の上ならずやあらむ」(二八七頁)。この院の言葉のなかに隆顕と二条、すなわち雅忠女との関係が明示されている。『とはずがたり』に語られている隆顕と雅忠女の強い結びつきと信頼関係を見れば、隆顕と雅忠女の亡き母は同母の姉弟とみなすのが自然であろう。とすれば、雅忠女も足利義氏の曾孫ということになる。しかも義氏の妻は北条泰時女であるから、隆顕は北条泰時の孫、雅忠女はその曾孫である可能性は大である(尊卑文脈などに足利義氏女の母の記載はないので、まだ確証は得られていないが)。ともかく隆顕と雅忠女の体の内には東国武士の血が濃厚に流れていたと思われる。

雅忠女が隆顕のことを、「いつものことなれば、我一人と申して、」(二八六頁)とか「さしも思ふことなく誇りた

る人」(三二六頁)と評しているように、隆顕は伝統的な貴族とは一風変わった気性をもつ、明朗闊達で親切な好人物。雅忠女とは気が合う年若い叔父、頼りになる兄のような存在だったに違いない。

隆顕は公卿補任によれば、寛元元年(一二四三)頃の生まれであるから、彼が誕生したところ祖父の義氏はまだ五代半ばで壮健だったはずである。事実、一二四七年に起きた宝治合戦でも活躍し賞として千葉秀胤の遺領を与えられている。『吾妻鏡』宝治元年七月十四日条)義氏は建長六年(一二五四)十一月に六十六才で死去したが、鎌倉幕府の武家儀礼である椀飯³をその年の正月二日に担当している(『吾妻鏡』建長六年正月二日条)ところを見ると、少なくとも建長六年の正月までは元氣であったと思われる、隆顕は、その少年時代、所領地のある美作と関東のあいだを往還していた祖父や伯父の薫陶を受け、鎌倉にも行ったことがあるのではないかと想像される。叔父・隆顕が多分得意そうに語る鎌倉の話聞きながら、雅忠女はまだ見ぬ武家政権の本拠地に一種の憧れを抱いていたのではないだろうか。雅忠女の鎌倉に対する憧れと関心を一層増幅させたと思われるのが、曾祖父・四条隆衡の弟・隆弁の存在である。

隆弁（一二〇八〜八三）は曾祖父の弟といっても実際には祖父・隆親（一二〇三〜一二七八）より数歳も年下。粥杖事件に関わる四条家の贖いの御酒盛の場にも隆顕とともに登場し、後深草院の命ずるままに隆顕の用意した道具を用いて鯉を料理するエピソードが描かれている（二八九頁）ことからして、雅忠女にとっても顔なじみの身内の一人であったと思われる。

『吾妻鏡』において、隆弁は「大納言阿闍梨」「大納言僧都」「大納言法印」「鶴岡（鶴岳）別当法印」「若宮別当法印」「若宮僧正」「若宮別当僧正」「鶴岡（鶴岳）別当僧正」など、その時どきの地位に応じて、さまざまな呼称をもつ。彼が初めて『吾妻鏡』に登場するのは近江の園城寺より鎌倉に下向したことを記す文暦元年（一二三四）三月二十二日条「大納言阿闍梨隆弁始参御所。召入見参云々。去六日自本寺下着」。彼に関する最後の記載は、宗尊親王の病氣平癒を祈る御修法結願を記す文永三年（一二六六）六月一日条。『吾妻鏡』は宗尊親王が京都に還御した文永三年七月で終わっている。この三十年余りのあいだに隆弁に関わる記述は実に百十数箇所。『吾妻鏡』全巻を通じて僧侶のなかでは最多である。このことから北条氏による武家政

権確立期における隆弁の活躍とその重要性が窺われる。実際、『吾妻鏡』に目を通してみると、この時期、地震は頻発し、旱魃、大雨、大風、火事と天変地異の連続。自然災害、凶兆、將軍家や得宗家周辺の病惱、妊娠、出産などのあるたびに頼りになるのは隆弁の加持祈祷であったようだ。

もともと隆弁は將軍・藤原頼経の護持僧として鎌倉に下向したようであるが、北条泰時の孫・北条経時の元服の日（文暦元年三月五日）の翌日に鎌倉に下着したところを見ると、加藤功氏が「鎌倉の政僧」のなかで指摘されているように、実際には「僧隆弁の下向は、幕府為政者よりの招請であって、実に北条経時の然る可き執権者としての学師に他あるまい。僧隆弁は、鎌倉への下向当初より既に政僧としての役割を担っていたと云える。」

隆弁は、鎌倉のみならず京都においても、その法力が高く評価されていたようで、後深草院誕生の際には上洛して加持祈祷を行ない、その賞として法印に叙せられている。

「京都使者参着。去十日午刻。皇子降誕云々。為此御加持。大納言僧都隆弁去年上洛。為件献賞。同廿日叙法印。此御誕生。別為將軍家御慶賀。有御外戚寄故也。（後略）」（『吾妻鏡』寛元元年（一二四三）六月十八日条）

後深草院の母・姞子（大宮院）は雅忠女の祖父・隆親の妹・貞子の女であるから、隆弁は言わば身内として出産予定の半年以上も前から上洛し皇子誕生を祈ったのであろう。このように後深草院と隆弁とのあいだには、その誕生以前から厚い好誼があったればこそ、粥杖事件の四条家の賤いの折に「鯉を料理せよ」などという無理難題をこの高僧に命ずることができたのだと思う。

『徒然草』第二百十六段には、最明寺入道・北条時頼が鶴岡の社参の次に隆顕の祖父である足利義氏の許に立ち寄り饗応を受けたことが記されている。あるじ方の席には、義氏と北条泰時女である義氏の妻、さらに隆弁僧正が座していたという。この話からも義氏夫妻と隆弁、時頼の親密な関係が想像されるが（義氏夫妻の嫡男泰氏の妻は時頼の妹）、実際、『吾妻鏡』を読んでもみると、兄・北条経時の跡を継いで二十歳で執権となった時頼が、彼の執権職就任に反対する者たちを抑えて得宗専制体制を築いていくうえで隆弁の法力をいかに頼りにしていたかが窺われる。

まず時頼執権時代に起こった最大の武力衝突である宝治合戦における両者の協働。宝治元年（一二四七）六月三日条によれば、時頼が戦勝祈願をする一方で、「即大納言法

印隆弁断五穀。於殿中修如意輪秘法云々。此外不及他祈祷云々。六月五日、遂に始まった激戦の末、三浦氏一族五百余人が自殺し、三浦氏は滅亡。その祈祷の賞により隆弁は六月二十七日、鶴岡八幡宮別当職に補任された。

また時頼の嫡男・時宗誕生をめぐるエピソードとして、『吾妻鏡』建長三年（一二五一）五月の記事には、時宗誕生に至るまでの時頼の不安、隆弁の夢告通り五月十五日酉刻に無事平産にて男子が生まれたことに対する一門の驚喜が余すところなく描かれている。（前略）相州御書云。今度男子平産。併所致御法驗也。就中兼日之仰。一事無相違。不言語之及所云々」（五月二十七日条）。

「有驗無双」と称賛された隆弁は將軍宗尊親王の病氣平癒の加持祈祷の賞として権僧正に任ぜられ（建長四年十一月）、さらに文永二年（一二六五）十一月には大僧正に昇進した。この鎌倉時代中期における隆弁の超人的な活躍を記したものは枚挙にいとまないので割愛するが、先に紹介した加藤氏の見解によれば、藤原頼経より頼嗣への將軍職譲与問題や北条経時より時頼への執権職譲与問題、さらには攝家將軍の廃絶、宮家新將軍の擁立問題においても隆弁は政界の黒幕として指導的役割を果たしたという。宗教界

においても隆弁は自らの出身母体である園城寺の興隆に努め、(文永四年(一二六七)には園城寺長吏となり、一時辞任したものの再任され、弘安六年(一二八三)の入滅直前まで在任)、鎌倉と京洛のあいだを何度も往復している。このように雅忠女の周辺には鎌倉と京洛双方の内部事情に精通した人物がおり、彼女も幼い頃より鎌倉に思いを馳せ、鎌倉の動きに絶えず関心を抱いていたのではないかと思う。

隆弁は先述のように四条隆衡の弟で四条家関係の人物であるが、土谷恵氏は新日本古典文学大系月報五二(一九九四年三月 岩波書店)に書かれた「東下りの尼と僧」のなかで、雅忠女の父方の家系、久我家の人びとに注目されている。氏によれば、「二条の父は久我通光の子雅忠。この父方の一族には鎌倉に下った人物がかなりいた。その一人が醍醐寺の僧親玄である。親玄は久我通忠の子で二条の従兄弟にあたる。」「親玄は後深草院の御所に祇候する僧で、久明親王の祈りを勤めるために、後深草院の命を受けて鎌倉に下向したのであり、久明親王下向の正応二年十月までには鎌倉に下っていたものとみられよう。」「親玄は得宗北条貞時のために様々な公私の修法を勤めており、実際は將軍の護持層としてよりも、得宗祇候の僧としての活躍が際

立っていた。」「親玄下向後の鎌倉には、久我家ゆかりの人々が数多く訪れた。二条の叔父にあたる七条の道明僧正もその一人である。」「親玄は鎌倉にあって京からの情報絶え間なく入手し、久我家ゆかりの人々に得宗への取り次ぎや下向の便宜を計らっていた。」

土谷氏の論から、隆弁亡きあと親玄がかつての隆弁と同じような役割を果たしていたことが窺える。つまり雅忠女はその父母双方の家系から鎌倉と太いパイプで結ばれていたであり、彼女のルーツにかかわる武家政権の都鎌倉は出家後まず訪れた地であったと思われる。

雅忠女の鎌倉下向については、「惟康親王より後深草院皇子・久明親王への將軍交代劇に関係があるのではないかと見る松本重至氏の説などがあるが、この政変が予想されていて西園寺実兼のような人物の指示により雅忠女が久明親王を手助けするために下向したと見ることは無理があるように思う。なぜなら須田亮子氏が『とはずがたり』鎌倉滞在記事の意味するもの」のなかで指摘されているように、雅忠女が鎌倉に向けて出発した正応二年二月の時点では久明親王への將軍交代は決定していなかったからである。また、御所を退出してから何年もたっている彼女が、

そのような命を受けることも不自然である。むしろ鎌倉滞在中に雅忠女のもつ情報網によって將軍交代劇のあることを知り、それを見届けようとしたのではないか。彼女が正応二年という年に鎌倉に下向した理由は資料を探しても解明できず、將軍交代劇に遭遇したことは奇遇であると言えないが、執権・北条貞時に依頼されて久明親王を迎える準備に携わったことは雅忠女の又従兄弟・土御門定美ゆかりの小町殿の存在に加えて先述の親玄や更には隆弁（彼は雅忠女鎌倉下向の数年前に死去しているが、死後もその門流が鶴岡八幡宮の別当職を継承した）の關係から彼女の鎌倉滞在がすでに鎌倉上層部に知られていたからであらう。雅忠女は父母双方の血脉を通じて鎌倉と強い結びつきを持っていたのである。

二

雅忠女の善光寺参詣に関しては、昭和三十九年に小口倫司氏が発表された「二条の善光寺参詣について」（『駒沢国文』第三号）において、「二条の信濃善光寺参詣の記事は作者二条の虚構であり実際には参詣していない」との善光

寺参詣否定説を、旅程に関する疑問、善光寺に向かう途中にある著名な歌枕の浅間山や姥捨山に関する記事を残していないこと、善光寺を参拝し信濃に長期滞在したというのに善光寺に関する記事があまりにも少なく体験の記事に欠けること、等々を根拠に主張されてから小口説に対して賛否両論が提出され、『とはすがたり』に関する大きな論点のひとつになっていたことは周知のとおりである。

私は、雅忠女と鎌倉との結びつきの深さ、彼女の罪業感の強さを考えるとき、善光寺には紛れもなく参詣したに違いないと、かねてより思っていたのであるが、須田亮子氏の論文『『とはすがたり』信濃善光寺参詣記事について』は信濃国と作者二条の関わりを多くの史料を精査して明らかにされていることで、参詣説に強力な根拠を与えるものとなっている。須田氏の指摘にもとづいて『明月記』や『公卿補任』などの史料を読んでみると、確かに雅忠女の母方の家系では曾祖父・四条隆衡（隆弁の兄）が信濃国の知行国主になっているし（『明月記』建保年（一二二一）閏九月十七日条）、父方の村上源氏では、やはり雅忠女の曾祖父・源通親の甥・源雅親が寛喜三年（一二三一）知行国主に任じられている。（『民経記』寛喜三年四月十四日条）

さらに一族には信濃介や信濃権守になったものもいるが、雅忠女とほぼ同時代の人物としては久我通雄が文永九年（一二七二）に信濃権介（『公卿補任』文永十一年）、永仁二年（一二九四）には、その子・長通が信濃介になっている（『公卿補任』永仁五年）。また小林計一郎『善光寺史研究』¹⁹には、「信濃の国衙はのちに久我家領となったほど、久我家は信濃国衙と関係が深く……」との記載もあり、須田氏の御指摘どおり雅忠女の父母双方の家系が信濃国と深い関わりを持っていたことが確認される。

須田氏はさらに鎌倉において雅忠女が統歌などをして親交を結んだ飯沼新左衛門（平資宗）の父で北条貞時の内管領であった平左衛門入道（平頼綱）が信濃国の守護代であった可能性を『諏訪大明神絵詞』の平左衛門入道・果圓に付けられた割注に注目し指摘されている。当時の鎌倉幕府の実力者である平左衛門入道が信濃国の守護代であったなら、善光寺参詣の便宜をはかってもらうことが多分できたであろう。須田氏の論文により雅忠女の信濃善光寺参詣説には強力な根拠が与えられた。

加えて彼女の善光寺参詣説を支えるものとして、鎌倉幕府や東国武士による厚い善光寺信仰があげられる。第一章

で述べたように雅忠女はそのルーツからして東国武士とゆかりが深かったと思われる。東国武士の頂点に立つ源頼朝は厚く善光寺を信仰していた。善光寺は『平家物語』巻二「善光寺炎上」に記されている（とく治承三年（一一七九）三月に炎上焼失したらしい。『吾妻鏡』によれば頼朝は文治三年（一一八七）に信濃国の目代や御家人に再建を命じており（文治三年七月二十七日条）、建久二年（一一九二）十月二十二日に落慶法要が営まれている。建久八年（一一九七）には頼朝の善光寺参詣も行われたようで、善光寺周辺には今も頼朝参詣に関連する多くの伝承が残されている。²⁰また三代將軍実朝も建保三年、善光寺の僧侶に絹布等を寄進するなど（『吾妻鏡』建保三年十二月二十日条）、善光寺を信仰していたと見られ、実朝の死後に出家した下野の御家人・信正法師が善光寺参詣を行なっているのも、善光寺が頼朝や実朝ゆかりの地であったからであろう。頼朝の門葉として常に頼朝と共にあった足利義兼も善光寺を信仰していたことが推測される。

頼朝の死後、北条時政に謀殺された比企能員に代わって信濃国の守護職についた北条氏が善光寺信仰とその保護を継承していく。たとえば北条泰時は小県郡の水田を不断念

仏料所として善光寺に寄進（『吾妻鏡』延応元年（一二三九）七月十五日条）、また泰時の孫・時頼も弘長三年（一二六三）に信濃国深田郷を買得し不断経・不断念仏衆の糧料として寄付している。（『吾妻鏡』弘長三年三月十七日条）

第一章で記したように雅忠女の母は足利義氏の孫である可能性が高い。義氏の妻は北条泰時女であり、恐らく泰時の善光寺信仰の影響を受けていたであろう。武笠朗「善光寺前立本尊と善光寺式阿弥陀三尊像」には「北条政子や宜秋門院が信仰し、泰時の信仰の背景にも近親女性がいたとみられるなど善光寺信仰と女性の関係はすでに鎌倉期から深いものであったらしい。」との指摘もある。

『とはすがたり』には母方の祖母の死について「夢のゆかりの枯れ果てぬるさまの心細き」（二四四頁）との記述が見られ、祖母との交流があったことを示唆している。この祖母が泰時の孫娘であるとは断定できないが、祖母の父・義氏の根拠地である足利は善光寺にも近く、義氏が北條泰時や時頼と共に戦った鎌倉幕府の重鎮であったことを考えると彼も善光寺を信仰していたと思われる、その娘である祖母を通じて雅忠女が善光寺への思いを強めていた可能性は高い。また、やはり第一章で縷々紹介した鶴岡八幡宮別当

の隆弁が、文永五年（一二六八）三月に焼失した善光寺の再建堂供養の導師を勤めるため、文永八年（一二七一）十月十日、善光寺に下向したことが『鶴岡社務記録』（『神道大系』神社編二十 鶴岡）により認められる。堂供養は十月十九日に催された。このように雅忠女を取り巻く状況が彼女の善光寺参詣の可能性を物語っているのである。

雅忠女の善光寺参詣否定説を唱える小口倫司氏は、「彼女が実際に参詣したのは信濃国ではなく川口にあった川口善光寺である」とされる。この川口善光寺とは、鎌倉時代に造られた善光寺如来像の模刻像を安置する、いわゆる新善光寺のひとつであるが、牛山佳幸氏の論文「中世武士社会と善光寺信仰」によれば、「ほぼ信頼しうと思われる史料によって実在が確認される新善光寺が鎌倉期に約二十ヶ寺、南北朝期に約八ヶ寺あるが、南北朝期に所見されるものも、実際にはそのほとんどが鎌倉期に建立されていたとみられる。」

牛山氏の研究によれば、得宗以外の北条氏一門で当初最も善光寺信仰に傾注したのは信濃善光寺の造営を担当した名越氏で鎌倉名越の山荘の地に接して新善光寺を建設した。その初見年代は仁治三年（一二四二）というから、雅忠女

が鎌倉に下向したときにはすでに鎌倉の地に存在していたはずで、彼女が新善光寺参拝で済ませる気なら、川口の善光寺まで行く必要はなかった。

それどころか坂井衡平著『善光寺史 下巻』¹³によれば、『平安後期は京洛の信仰期にして京都善光寺盛行せり。』とのことで、京都にも皇室の尊崇を集めた六条来迎堂新善光寺が鳥羽院により建立されている。また『明月記』嘉禎元年（一二三五）閏六月一九日条にも「禪尼数輩乗車礼近日可聞三尊像。近日京中道俗騒動礼拝云々。奉写善光寺仏云々。」という記載があり、京都で善光寺仏を礼拝することは可能で（模刻像ではあるが。すべての新善光寺も同様）、鎌倉まで下向する必要もなかったのである。

三

それでは雅忠女は旅の労もいとわず、なぜ信濃善光寺の参拝を願ったのか。鎌倉時代を生きたものたちにとって、信濃善光寺とはどのような存在だったのか。

『一遍聖絵』第一、第三段には一遍の善光寺参拝について次のような記載がある。「文永八年の春、ひじり善光寺

に参詣し給ふ。この如来は、天竺の靈像として日域の本尊となり給へり。酬因の来迎を示して影向を東土の境にたれ、有縁の帰依をあらためて、靈場を信州のうちにしめ給ふ。

一光三尊の宿縁如来の密意を表し、決定往生の勝地、給他方の淨域に超たり。誠に三国伝来奇特言語みちたえ、五濁態度たゞ本誓思量ながくつきぬ。『いま宿縁あさからざるによりて、たま／＼あひたてまつる事を得たり』とて、参籠日数をかさねて下向したまへり。この時已証の法門を顕し、二河の本尊を図したまへりき。¹⁴

この記述を見れば、鎌倉時代において信濃善光寺仏がどのような存在であったか、理解される。善光寺の由来を記した『善光寺縁起』はすでに平安時代には成立しており、善光寺の本尊である一光三尊阿弥陀如来像は欽明天皇の時代に百済の聖明王から贈られた三国伝来本朝最初の靈像、本師仏であり、その阿弥陀如来像は実際に生きている「生身」の如来である、という説が善光寺信仰の普及に努めた善光寺聖などの活動によって広く信じられていた。¹⁵

一遍の信濃善光寺参拝については一遍や時宗の研究者が多く語っているところなので割愛するが、その代表的な見解として今井雅晴『時宗成立史の研究』¹⁶から要約すれば、

「一遍は修行時代に大宰府に近い筑前国稻光の善光寺に何かにつけて往来して勸化を受けたが、「生身」に対する憧れは一般の人びとよりも強く、生身の阿弥陀仏に直接まみえて教えを受けたいという氣持が強烈だったため、数ある阿弥陀仏のなかでも、遠方にもかかわらず、信濃国善光寺の本尊を選んだ。」

この見方はそのまま雅忠女が善光寺参詣を志した理由を説明したものとも言えるだろう。恐らく彼女は京都近辺にある新善光寺はすでに何度も参拝していた。しかし「生身」に対する憧れは強く、何としても信濃善光寺仏を参拝したいと願った。雅忠女鎌倉下向の最大の目的は信濃善光寺参拝にあったのではないかと私は思う。

奥健夫「生身仏像論」によれば「生身の仏に値遇することとが、浄土信仰者によって願われたのは、それが将来の極楽往生を約束する徴証と考えられたからである。」

戦いと殺生を生業とする武士たちが「生身の仏」に救いを求めたのは当然である。ましてや身内同士で殺しあう苛酷な戦いを経て権力を掌握した頼朝や時頼は墮地獄の恐怖に苛まされ、眠れぬ夜を過ごすことも多かったに相違ない。彼らが信濃善光寺の再建や土地を寄進して「生身の仏」に

救いを求めたように、雅忠女も「生身の仏」に救いを求めていた。信濃善光寺は女人救済の霊場としても知られていたのである。

四

『とはすがたり』善光寺参詣の場面には「宿願の心ざしありて、しばし籠るべきよしを言ひつつ、帰さには留まりぬ。」「生身の如来と聞きまゐらずれば、頼もしくおぼえて、百万遍の念仏など申して明し暮らすほどに、」（四四七〜四四八頁）などの記述がある。雅忠女は鎌倉下向を果たすとすぐにでも信濃善光寺参詣への旅を望んでいたようであるが、「善光寺の先達に頼みたる人、卯月の末つ方より大事に病み出だして、前後を知らず。」（四三四頁）という状況に陥り、彼女自身も病んで、善光寺参詣が実現したのは京都を出発してから一年後のことである。ようやく額づくことのできた「生身の仏」の御前で百万遍の念仏を唱えつつ雅忠女は一心に何を祈ったのであろうか。娘に心を残して亡くなった父母の冥福を祈ることながら、言わば非業の死を遂げた最後の恋人・有明の月の冥福と二人の

魂の救済を何よりもまず祈ったのではないかと思う。信濃善光寺には失意の女性が寺に入り出家する話や救われた話が数多く残っている。曾我兄弟の兄十郎祐成の愛妾・大磯の遊女虎御前が、祐成の死後、三七日の法事を済ませた後に出家して善光寺に入ったことは『吾妻鏡』にも記載されているから、たぶん実話だったのであろう。前掲の小林計一郎『善光寺史研究』によれば、「鎌倉時代には、愛人または夫を失った女が、亡き人の菩提をとむらう場所として、善光寺がもっともふさわしい場所であるという常識が、はつきりとできあがっていたわけである。」

雅忠女はなぜ出家したのか。女が出家する動機として最も可能性が高いのは、この虎御前のように愛人または夫を失ったときである。雅忠女が関わりをもった男たち、後深草院、雪の曙、亀山院、近衛大殿、有明の月、この五人の内、彼女が出家した時点で亡くなっていたのは有明の月、ただ一人である。雅忠女が有明の月の菩提をとむらうために出家したと考えることに、それほど無理はないと思う。

言わば有明の月は破戒僧である。後深草院の弟、法親王、仁和寺御室として国家や皇室の安泰を祈る立場にありながら、雅忠女に対して凄まじいまでの愛執の念をいだき、御

修法にも身が入らない。「仏も心きたなき勤めとやおぼしめすらむと思ふ。」(二九三頁)、後深草院のための延命供も「この度の御修法は心清からぬ御祈誓、仏の御心中も恥ずかしきに、」(三〇〇頁)、「念誦の床にも塵積り、護摩の道場も煙絶えぬべくこそ。」(三〇一頁)という有様。しかし時は文永の役の直後、国家は危機に直面していた。

雅忠女との関係が途絶えたとき牛王宝印の裏に書きつけ送り届けられた有明の証文「いかなる魔縁にか、よしなきことゆゑ、今年二年、夜は夜もすがら面影を恋ひて、涙に袖を濡らし、本尊に向ひ持経を開く折々もまづ言の葉を偲び、護摩の壇の上には文を置きて持経とし、御灯明の光にはまづこれを開きて心を養ふ。…このうへは文をも遣はし、言葉を交わさむと思ふこと、今生には思ひを断つ。さりながら、心の中に忘ることは生々世々あべからざれば、我さだめて悪道に墮つべし。されば、この恨み尽くる世あるべからず。兩界の加行よりこの方、灌頂に至るまで、一期の行法、読誦大乘、四威儀の行、一期の間修するところ、みな三悪道に回向す。この力をもちて、今生長く空しくて、後生には悪趣に生まれあはむ。…」(三一二頁)。

「形は世々にと変わるとも、相見ることだに絶えせずは、い

かなる上品上生の台にも、ともに住まずは物憂かるべきに、
いかなる藁屋の床なりとも、もろともにだにあらばと思ふ」
(三八五頁)。

有明は、すべてを捨て、いかに貧しくてもこの世で雅忠
女と共に暮らすことのみを願ひ、後生に共に三惡道に墮ち
ることも辞さない。「いかに漏るべき憂き名にかと恐ろし
ながら」(三五六頁)と、他人の目を気にしながらも「こ
れや逃れぬ契りならむと」(三五七頁)、後深草院の了解の
もと、雅忠女は有明の月との愛の深淵に沈んでいく。四歳
より宮中で育ち軽い恋愛遊戲に慣れきっていた彼女にとっ
て、それは未知の体験だった。有明と濃密な時を過ごすこ
とができたのも束の間、彼は病に取りつかれて急死。有明
の月はかつて雅忠女が行方知れずになったとき、必ず下界
で今一度契りを結ぶことを願って書写した五部大乘經を薪
にし、煙となって消えたという。有明の月が病を押して最
後に遣わした文に書かれた歌。(三八八頁)

身はかくて思ひ消えなむ煙だにそなたの空になびきだ
にせば

有明の月は雅忠女に限りない愛執の念を抱いたまま亡く
なった。有明自身、「かかる病に取り籠められて、はかな

くなりなむ命よりも、思ひ置くことどもこそ罪深けれ。」
と最後の文に記し、彼の死を知って雅忠女も「はかなくな
りたまひぬと聞きしは、夢に夢見るよりもなほたどられ、
すべて何と言ふべき方もなきぞ、我ながら罪深き。」(三八
八頁)と述べている。愛執の念を抱いたまま亡くなった有
明は、たぶん往生できないであろう。すぐにも出家して彼
の菩提をとむらいたいところであるが、「まことの道に入
りても、常の願ひなればと思ふさへ、人の物言いひも恐ろ
しければ、亡き御陰のあとまでも、よしなき名にや止めた
まはむと思へば、それさへかなはぬぞ口惜しき。」(三八九
頁)

法親王である有明との関係は決して他人に知られてはな
らない。その上、雅忠女は有明の二人目の子を宿していた。
「浮き沈み三瀬川にも逢ふ瀬あらば身を捨ててもや尋ね行
かまし」(三九〇頁)と思いつつも、諸般の事情から彼女
は出家のチャンスを失った。

五

雅忠女が尼姿になって登場するのは、有明の月の死から

数年後のことである。彼女が、いつ何故に出家したのか、記されてはいないが、出家してから訪れた寺社の多くが阿弥陀信仰の地であり、また五部大乘経の書写供養を宿願としていたことを考えると、死後、悪趣に沈み苦しんでいるであろう有明の月の菩提をとむらうこと、それが出家と行脚の旅に出た第一の理由であるとしか考えられない。

五部大乘経は、有明の思い出につながる因縁の経である。彼は雅忠女が姿を隠したとき「にはかに雲隠れぬと聞きしにも、かこつ方なかりしままに、五部の大乘経を手づから書きておのづから水茎の跡を、一卷に一文字づつを加へて書きたるは、かならず下界にて今一度契りを結ばむの大願なり。いとうたてある心なり。この経、書写終りたる、供養を遂げぬは、この度一所に生まれて供養をせむとなり。竜宮の宝蔵にあづけたてまつらば、二百余巻の経、かならずこの度の生まれに供養を延ぶべきなり。されば、我北郎の露と消えなむ後の煙に、この経を薪に積み具せむと思ふなり」(三八五―六頁)。

流行病にとりつかれた有明の月は臨終に際し、いつも念誦の床に置いていた雅忠女の形見の小袖を身につけ、この言葉どおり五部大乘経を薪にし煙となって消えていったと

いう。有明が日夜、雅忠女を思いつつ五部大乘経を書いていた姿を想像すると、鬼気迫るものがある。

五部大乘経は『拾芥抄』によれば、華嚴経六十巻、大集三十(五十)巻、大品般若経四十(三十)巻、法華経十巻、大般涅槃経三十八(四十)巻。数え方にもよるが、都合二百五巻、料紙四千二百二十枚。ともかく膨大な数である。これを短期間で書き上げた有明の執念は鬼神に通じ、もはやこの世のものとも思われない。

雅忠女の五部大乘経書写供養に関しては、渥美かをる『とはすがたり』作者の五部の大乘経書写をめぐる^①や須田亮子『とはすがたり』後深草院二条と五部大乘経の書写供養―祖父源通光の影響をめぐる^②―などの御論文があり参考にさせていただいたが、いずれも有明との関係についての(彼の冥福を祈るための)言及はない。須田氏のご指摘どおり、平安時代後期から鎌倉時代にかけて五部大乘経供養がさかんに行われていたようで、『吾妻鏡』にも散見される)、『後嵯峨院、後深草院、龜山院と』とはすがたり』の主要な登場人物が恒例行事として五部大乘経供養を催行していたこと、雅忠女の祖父・源通光が不遇時代に五部大乘経の書写供養を行なったこと」等々のご指摘

は注目すべきであるが、「二条は、御所退出後、不遇の時期を過ごしていた。その後半生において、彼女が五部大乘経の書写供養を実行したのは、尊敬する祖父源通光が、かつて、五部大乘経の書写供養をして、その後、成功を収めたことがあったためである。『とはずがたり』の中で、熱田社に拘ったのも、後深草院と父源雅忠に関係あった場所ということもあろうが、さらに通光とも深いつながりを持っていたことが大きいであろう。以上の事情から『とはずがたり』作者、後深草院二条は、久我家の伝統、中でも祖父源通光の影響を大いに受けて、五部大乘経の書写供養を実行したものと考えられる。」との見解に対しては、写経の一部の奉納先を熱田社にした理由については同意できるものの、通光が成功を収めたことに因んで雅忠女が書写供養を実行したという見方には賛成できない。

有明の月は雅忠女と一所に生まれることを願って五部大乘経を書写し、自らを茶毘に付す薪とした。有明が悪趣に堕ちているなら、彼女もそこに堕ちるに違いない。二人の子らの父であり、自分を狂気の沙汰とも言えるほど愛した男のために、そして自らの救済のために、雅忠女は五部大乘経の書写供養を決意したのだと思う。

岩波セミナーブックス二〇四、古典講読シリーズ、三角洋一著『とはずがたり』（一九九二年九月発行）のなかに、春日社に経を奉納する例をあげて、「春日社はことに後嵯峨院と後深草院の尊崇篤い神社でした。前方便といって、まず準備のため三週間は精進潔斎しなければならないので、おそらく一、二箇月間か、法華堂や写経所に籠りっきりで、滞在費だけでもたいへんなら、使用する紙代やら奉納にあたっての供養のお布施やら、物入りだったことと思います。」との御指摘があるが、雅忠女は膨大な写経奉納の費用をどこから捻出したのか。そして何年にもわたる長期の旅の費用はいかにして調達したのだろうか。四条家との縁が薄れてからは、彼女には後見人もなく、衣装を整えることにも苦勞していたのである。

有明の月が遣した金に関しては、有明の四十九日の法要に際し、「かの御心ざしありし金すこし取り分けて、諷誦の御布施にたてまつりし」（三九二頁）と記されており、有明の冥福を祈るために彼が遣してくれたものを役立てようとしていたことがわかる。言わば有明の御心ざしの遺産があったればこそ、彼女は五部大乘経の書写供養をすることができ、長期間にわたる旅も続けることができたのだと

思う。五部大乘經の書寫供養が彼の冥福を祈るためになされたと考えるのは自然であろう。有明の死後、雅忠女が涅槃會に参加した折、「聽聞所に袖片敷きてまどろみたる曉、ありしに交らぬ面影にて、『憂き世の夢は長き闇路ぞ』とて、抱き付きたまふと見て、おびただしく大事に病み出しつつ、心地もなきほどなれば、」(三九三頁)となり、また「彼岸の御懺法、兩院嵯峨殿の御所にてあるにも去年の御面影身を離れず、あぢきなきままには、『生身二伝の釈迦と申せば、唯我一人の誓ひ過たず、迷ひたまふらむ道のしるべしたまへ』とのみぞ思ひつづけはべりし。」(三九七頁)苦しんでいる有明の面影が離れず、雅忠女も救いを求める心、切だったに違いない。

雅忠女が参拝した寺社の多くは阿弥陀信仰に関わりをもっている。先に見た「生身の仏」のいる善光寺はもとよりのこと、石清水八幡宮や鶴岡八幡宮に鎮座する八幡神の本地仏も阿弥陀如来。雅忠女は八幡神について、『苦の衆生に代らむために、御名を八幡大菩薩と号す』とこそ申し伝へたれ。(五一頁)と記している。

奈良の法華寺はまさに滅罪の寺、法隆寺、中宮寺は聖徳太子ゆかりの寺、当麻寺は中将姫と当麻寺曼陀羅で知られ

ている。雅忠女は四天王寺にも参詣しているが、牛山佳幸「善光寺創建と善光寺信仰の發展」²¹⁾によれば、「聖徳太子建立の四天王寺は、院政期までに園城寺末寺として寺門派の僧侶が別当に補任されていたが、寺内ではその西門が極楽浄土の東門とする思想が定着し、欣求浄土の熱烈な信者に支えられて、日夜弥陀の念仏の絶えない浄土信仰の一大メッカとなっていた。四天王寺と善光寺とはいろいろの点で共通点があるが、とりわけ聖徳太子と善光寺如来が手紙のやり取りをしたという伝承が、鎌倉時代初期までに成立することなどは、四天王寺信仰との関係を無視しては説明できないことであろう。」とのことで、やはり四天王寺は善光寺と関係の深い浄土信仰のメッカだったのである。

熊野本宮も浄土信仰の地であった。五来重氏によれば、「元来熊野は山中他界と海上他界の二つの信仰をもつところであった。…山と海で外海から隔絶されたこの地方は死者靈魂の行く国(隱国)とかんがえられたらしい。このようなことから熊野本宮は本地阿弥陀如来と信じられた」²²⁾。

今まで見てきたように、雅忠女の訪れた寺社はその多くが阿弥陀信仰に関係のある地であった。彼女はそこで有明の月と自らの救済、父母をはじめとする亡き人びとの冥福

を祈ったのではないだろうか。

おわりに

七年前に拙稿「無縁の女」を書いたときから、雅忠女の旅の実態はどのようなものだったのか、折に触れては考えていた。彼女は時宗に帰依していたのではないだろうか。帰依していたとまでは言えなくても大いなる影響を受けていたのではないだろうか。

『一遍聖絵』によれば、弘安七年（一二八四）四月、一遍一行が京都に入ったとき貴賤上下群をなし身動きもできないほどの賑わいで、その折、久我家の一族である土御門入道前内大臣・中院通成（雅忠女の父の従兄弟）が念仏結縁のため訪れたという。弘安七年といえは、有明の月の三回忌を営んだ翌年である。一遍は京都滞在中、空也の遺跡である市屋に道場を開いて一か月ほど教えを説いたというから、彼女も一遍の教えに触れる機会があったと思う。一遍は布教の折、「南無阿弥陀仏 決定往生六十万人」と刷られた札を配っている。いわゆる賦算である。雅忠女もこの札をどこかで手に入れたかもしれない。それは彼女にとっ

て救いとなったことだろう。

中世における旅のあり方を考えるとき、時宗の果たした役割は実に大きいようである。榎原雅治「中世東海道の宿と渡の空間構成」によれば、「時宗寺院は宿を支える一大勢力で、とりわけ権力者の宿泊施設として時宗道場が使用された。宿となる寺院建設資金の調達は、遊行僧の勧進行為と在地の武士層の協業によって行われた。遊行僧を始めとする宗教者たちのネットワークは宿と宿の情報交換を容易にし、彼らのもたらす情報は道路情報として中世の旅人たちにとって不可欠なものとなっていた。」雅忠女がたとえ時宗の尼ではなかったとしても、ときには時宗関係の施設に泊まることもあったろうし、彼女が旅をする上で、このようなネットワークの存在は助けになったに違いない。時宗の遊行僧や一般に宗教者たちは「無縁」の輩の代表的な存在である。旅の途次、雅忠女は時には彼らと同宿し、「無縁」の人々と互いに助け合うこともあったと思う。

ところで有明の月が雅忠女のために遣してくれた「ひとはたの金」、これはもちろん砂金であろう。これを写経奉納や旅の資金に充てたと思うのだが、それは現実にはどのように使われたのか、そこには金融業者の存在が考えられ

る。雅忠女が有明の四十九日の法要に砂金を少し取り分けて御布施として寺に納めたことは前にも記したが、このように寺に奉納する以外は、砂金は金融業者に預けておいて、為替の発行や両替をしてもらい、現実の費用に充てていたと思われる。網野義彦『無縁・公界・楽』において、「金融の行為は『無縁』の場合、『無縁』の人々と不可分な関係にあり、『無縁』上人・聖、さらに広く『無縁』の輩と『倉庫』『金融』は切り離し難く結びついていた」との指摘がなされているが、雅忠女はこの点でも「無縁」の人々と深い関わりを持っていたのである。

雅忠女は生涯を通じて自分の家庭をもつこともなく、夫と言える存在もなく、少なくとも四人産んだ子供とも死別生別し、寄る辺のない無縁の女であった。しかし彼女は、宮廷や家庭の束縛をはなれて尼となり、中世の自由の原理に通ずる「無縁」の人びとに支えられて生きることができ、長旅をつづけることもできた。七年前に書いた拙稿で、私は雅忠女のことを「あらゆる意味において、二条は無縁の女だったのである」と記した。しかし彼女は本当に無縁の女だったのだろうか。雅忠女は自らの人生において関わった多くの人たちを強く心のなかで抱きしめながら生きてき

た。一遍が説くように一切を捨離することはできなかった。その証がこの『とはずがたり』を書いたことである。雅忠女は稀有なほど多くの「有縁」のものたちに恵まれた、類まれなる「有縁の女」だったのである。

注

(1) 本稿を作成するにあたり参照した網野氏の著作を左にあげる。再度の付注は省略する。

『日本中世都市の世界』筑摩書房 一九九六年。

『増補 無縁・公界・楽』平凡社 一九九六年。

『日本中世に何が起きたか』洋泉社 二〇〇六年。

(2) 田中大喜編著『下野足利氏』戎光祥出版二〇一三年に足利氏の歴史が詳述されている。

(3) 槐飯とは鎌倉幕府の有力御家人が御所において將軍を饗応する行事のこと。このうち正月三が日に行なうものを、正月槐飯といい、有力御家人が日替わりにこれを担当し、御家人の政治的順位が示される。鎌倉幕府成立直後の一九四年、九五年の元日の槐飯は足利義兼が担当している。

(4) 『歴史教育』第一六巻第二号、一九六八年二月。さらに隆弁に関しては、湯山孝「隆弁とその門流——北条氏と天台宗（寺門）——」（『鎌倉』第三八号、一九九七年）を参照した。

(5) 土屋氏は東京大学史料編纂所蔵の『親玄僧正日記』の写真帖を論拠にしており(私も史料編纂所にて閲覧)、本稿ではその一部の要点を記した。また、高橋慎一郎『親玄僧正日記』と得宗被官(五味文彦編『日記に中世を読む』古川弘文館、一九九八年)からも示唆を受けた。

(6) 松本寧至『中世女流日記文学の研究』明治書院一九八三年、参照。久保田淳氏も新編日本古典文学全集の解説において松本氏に近い見解を述べている。

(7) 関西軍記物語研究会『軍記物語の窓』第三集。和泉書院二〇〇七年十二月、所収。

(8) この論争に関しては、小口倫司「再び『二条の善光寺参詣について』研究の経過とその私見」(『長野』第六四号、一九七五年一月)に詳述されており、また同誌に参詣説賛成派の小林計一郎「二条の善光寺参詣について」も掲載されている。

(9) 『女子大國文』一四二号 二〇〇八年一月、この論文において須田氏は多くの史料を精査して論を展開している。私も須田氏の提出したすべての史料を確認したが、本稿では、その一部の要旨を紹介した。

(10) 信濃毎日新聞社 二〇〇〇年五月刊行。

(11) 頼朝が建久八年三月に善光寺参詣をしたという記録は、『吾妻鏡』にはその年の記録が欠けているので確認できない。

無縁の女(その二)

いが、『相良家文書』(『大日本古文書』)と『立川寺年代記』(『続群書類従』巻第八百五十九)での確認はでき、また善光寺周辺には頼朝に関係する「駒返り橋」「頼朝院十念寺」などもあることから、頼朝の善光寺参詣は実際に行われたと見られる。

(12) 善光寺御開帳記念 善光寺信仰展「いのりのかたち」展 示図録二〇〇九年四月、所収。

(13) 鎌倉遺文研究会『鎌倉時代の社会と文化』東京堂出版一九九九年四月、所収。牛山氏のこの論文には「鎌倉期を中心」という副題がついており、鎌倉・南北朝期の新善光寺一覽が載るなど、当時の武士の善光寺信仰の実態が詳述されている。本稿に後述する明月記の記事も牛山氏の指摘に基づく。

(14) 東京美術 一九六九年五月刊行。

(15) 大橋俊雄校注『一遍聖絵』岩波書店二〇一五年(再版)を基に、長島尚道「一遍の善光寺と熊野参籠」(一遍研究会編『一遍聖絵』と中世の光景)ありな書房一九九三年一月所収)を参考にして記した。

(16) 善光寺関係の書籍や研究書はたくさんある。本稿を書くうえで、個別に提示したものの他に次のものを参考にした。金井清光「善光寺聖とその語り物」(『時衆文芸研究』風間書房一九八九年一月所収)、小林計一郎『善光寺さん』銀

河書房一九七三年三月、五来重「善光寺信仰と聖」(伊藤延男ほか編集『善光寺』第一法規出版一九九一年四月所収)、杉山二郎『善光寺建立のなぞ』信濃毎日新聞社二〇〇六年七月。

(17) 吉川弘文館一九八一年八月刊行。

(18) 長岡龍作編『講座日本美術史4 造形の場合』東京大学出版会二〇〇五年九月、所収。

(19) 『国文研究』(名古屋大学) 一号 一九七二年三月、所収。

(20) 『国文論藻』(京都女子大学) 三号 二〇〇四年三月、所収。須賀氏のこの論文には、後醍醐院、後深草院、龟山院による五部大乘経供養の一覧表や『とはすがたり』に登場するその他の人物と五部大乘経供養の関わり、とりわけ源通光の写経供養について詳述されている。本稿ではスペースの関係で、そのごく一部しか紹介できなかった。

(21) 五来重他編集『善光寺 心とかたち』第一法規 出版一九九一年四月、所収。

(22) 五来重「一遍と高野・熊野および踊念仏」新修日本絵巻

物全集11『一遍聖絵』角川書店一九六〇年、所収。

(23) 松本寧至「『とはすがたり』に見られる時衆の影響——後深草院二条の旅の側面——」『文学と仏教』第一集、教育出版センター、一九八〇年)も、時衆との密接な関係を描き出している。

(24) 五味文彦他編集『考古学と中世史研究9 一遍聖絵を歩く——中世の景観を読む——』高志書院二〇一二年七月所収。本稿では、その一部の要点のみを記した。

(25) 「砂金を金融業者に預けて為替の発行や両替をしてもらった」可能性については、中世史研究者にお聞きしたことである。本郷恵子『中世人の経済感覚』(NHKブックス二〇〇四年)は大いに参考になった。そこに大般若経書写費用として三十貫(およそ五百万円) 勸進した僧が強盗に殺された話も載っており、写経費用の莫大なことの示唆ともなる。

(元本字非常勸講師)